

ベトナム戦争期における同時代的な記憶とその再生

——在ベトナム日本人のライフストーリー

*Contemporaneous memory and its retrospection during the Vietnam War:
Life story of Japanese who lived in Vietnam*

大塚直樹* [立教大学観光学部・兼任講師]
OTSUKA, Naoki

*亜細亜大学国際関係学部・准教授

Summary: The purpose of this paper is to identify the actors of the Vietnam War from the life story of the Japanese who spent the Vietnam War era in the region, and to clarify how those people and the Japanese were involved. In this article, I took the case of the southern region, which was the main stage of the Vietnam War, and describes the life story of the people who experienced the Vietnam War locally but did not leave a record. In other words, it describes the dynamics of the social space in the southern part of Vietnam through the regeneration of memories and narratives. As conclusion, it should be understood that the social justice of north-south unification in the south is based on the withdrawal of the United States, and inside it, various ideals and speculations were complicatedly intertwined and historically developed.

Key words: ベトナム戦争 (Vietnam War), 記憶 (Memory), ライフストーリー (Life story), 残留日本兵 (Stayed Japanese soldier), 仏印進駐 (Japanese invasion of French Indochina)

I はじめに

II インフォーマントとの出会い

III 農園長着任と残留日本兵との邂逅

IV 戦争期の同時代的な記憶

解放戦線と自警団

ローカルな戦争観

残留日本兵とB氏・C氏

1975年4月30日以降のサイゴン

V むすびにかえて

I——はじめに

本論文は、ベトナム戦争時代を当該地域で過ごした日本人のライフストーリーに基づき、ベトナム戦争のアクターを位置づけること、そうした人びとと日本人がどのように関わったのかを明らかにすることを目的とする¹。

ベトナム戦争は、当時および現在のベトナム国内では「抗米救国戦争」と呼ばれることが多い。実

際、当該期間の記述がみられるベトナムの9年生（日本の中学3年生に相当）の歴史教科書の目次には、ベトナム戦争という用語が登場しない（ファン・ゴク・リエン，2008²）。視点を変えれば、国名であるベトナムに戦争を付した単語が固有名詞として語られるほど、ベトナム戦争は全世界にインパクトを与えた歴史的事実といえよう。

周知のごとく、ベトナム戦争に関する歴史研究は日本内外で膨大な数に達する。また同時代的な視点から記述された日本人によるルポルタージュも数多く存在する。一例をあげるとすれば、石川（1991；2018）、岡村（1965；1966）、開高（1990）、古森（1985）、近藤（1981；1985）、本多（1981）、またやや時代が下るが大石（1984）、中村（2005）らがいる。

以上の著作は、主として従軍記者・駐在の特派員の視点からベトナム戦争を多面的に描いたり、日常生活なかのベトナム戦争を記述したりしている。いずれも日本人がベトナム戦争をどのように報道し、またベトナム社会ならびに戦争とどのように関わっていたのかを鮮明に伝える記録となっている。こうした著作は、当然ではあるが、記録を残した人びとの物語である。他方において、当時のベトナムには、記録を残していない日本人も数多く在住していた。たとえば、時代がややさかのぼるものの、吉沢は、仏印進駐に軍人・農業技術員などで従軍し、敗戦後も現地に残留した帝国日本の人びとのライフヒストリーを丹念に追うことで、当時のベトナムにおける「日本人」の生活世界の多様性を描き出した（吉沢，1986）。

吉沢（1986）の研究以降、残留日本兵とも呼ばれる人びとがアジア・太平洋戦争後にいかなる現地生活を送ってきたかについて少しずつ明らかにされてきた。たとえば、井川は、日越関係の在り方を探りながら、残留日本兵の状況を体系的に報告している（井川，2005；2006）。ゴジャ・立川および立川は、残留日本兵が現地に残った理由を

当時の史資料や当事者へのインタビュー調査に基づき考察している（ゴジャ・立川，2001；立川，2002）。また青沼や林は、東・東南アジアに残留した日本兵の足跡を包括的に検討している（青沼，2008；林，2012）。秦は、昭和史の秘話を追うというコンテクストから、ベトナム残留日本兵をとりあげ、ベトミンにおけるこれらの人びとの活動を描き出している（秦，2012）。あわせて、アジア・太平洋戦争後に残留した人びとの手記的な書籍も散見される（e.g. 石田，1990；加茂，2008³）。

しかしながら、吉沢（1986）のように、これらの人びとが日常生活のレベルでどのようにベトナムの社会に関わりをもっていたのかを詳らかにした研究は非常に限定的である。こうしたなか2017年2月末から3月上旬にかけて現在の上皇が訪越し、残留日本兵ならびにその家族の話題がマスメディアで取りあげられ、ベトナム社会における残留日本兵に関して再び注目が集まるようになった。

また、ベトナム戦争期の同時代的な記録という視点からみると、武内・宮沢が当時の「大南公司」の一社員の駐在日記を紹介・解説している（武内・宮沢編，2015）。この日記には、ゴー・ディン・ジエム政権が確立していく時期の現地社会の状況が日越関係などとともにも克明に記録されている。

以上に鑑みて、本稿ではベトナム戦争の一舞台となった南部地域の事例を取りあげ、ベトナム戦争を現地においてリアルタイムで体験し、かつ記録を残さなかった人びとのライフストーリー、言い換えれば同時代的な記憶と語りの再生を通じてベトナム南部の社会空間の動態を記述してゆく。

II——インフォーマントとの出会い

筆者はベトナムと関わりを持つようになって20年ほどたつ。しかしながら、メコンデルタ地方での滞在期間が長く、ホーチミン市での調査期間が

短いこともあり、現在ベトナムで生活をしている日本人との関わりは非常に限定されていた。あるとき、ほぼ唯一、交流を持ち続けている男性から「ベトナム戦争時にここで暮らしていた日本人の男性と知り合ったので今度紹介したい」と連絡を受けた。そして紹介を受けたのが今回のインフォーマント、A氏である。

A氏は、現在東京に暮らしており、ベトナムと日本とを約3ヶ月ごとに行き来する生活を送っている。そこで先の男性の紹介でA氏がホーチミン市に滞在中に同地で数回会って食事をしながら雑談をした。当然ながら、会話のなかで歴史(書籍)上の人物の名前や出来事が出てきた。さらに、A氏の当時の仕事について話が及ぶと、1963年から75年までベトナム南部に在留し、主として貿易業に従事していたこと、カイベー(Cai Be、現在のティエンザン省に位置)方面で残留日本兵と交流を持ったことが話題に出た。今回のインタビュー調査はその後、日本でアポイントをとり直し、2019年7月ならびに8月に計2回実施した⁵。

以下に本稿に関連するA氏の略歴を記す。

1942(昭和17)年生まれ、男性

1963年11月 日系の果物輸出会社に就職のため、当時のサイゴンに渡航

1964年 果樹園の農園長としてメコンデルタのカイベー近郊に居住

1969年上半期 果物輸出会社一時撤退のため、日系の貿易業者に転職。以後、終戦までサイゴン在住

1969年11月 ベトナム人女性と結婚

1975年4月30日 サイゴン陥落を目撃。当日は日本大使の公邸に⁶

1975年5月15日 戦勝パレードを目撃

1975年7月 ビエンチャン・バンコク経由で帰国

1975年以後 帰国後、約1年間の大阪での勤務などへて、現在は東京在住

1992年 サイゴン陥落後、初めてベトナムを再訪

III——農園長着任と残留日本兵との邂逅

まずはA氏がサイゴンへ赴任し、農園長に着任した経緯から確認したい。A氏がサイゴンに赴任する契機は友人の仲介にあった。A氏の友人は、当時の神田市場でレモン・バナナを主に扱っていた輸入業者の社長の子息と縁故があった。当時、非常に高価であった台湾バナナには、輸入割当制度が適用されており、取扱量が制限されていた⁷。そこで、同社の社長は、バナナの輸入拡大を目論み、子息を東南アジア方面へ視察に送り出した。A氏の記憶では、1960～61年くらいにかけてということである。

最終的に当時のベトナム共和国(南ベトナム)が輸出拠点として選択された。その後、サイゴンに貿易会社を設立し、バナナの輸出をおこなうことになった。サイゴン事務所の社長には先の子息が就任した。しかしながら、この社長はサイゴン事務所に常駐していたわけではなく、現地で実際の業務を取り仕切る人材としてA氏の友人を起用した。その後のさらなる人材補充でA氏に白羽の矢が立ち、A氏は1963年11月26日にサイゴンへ渡航した。なお、サイゴンにおける貿易会社の設立は、1961年もしくは62年であったという。

1963年11月における(南)ベトナムをめぐる情勢として、まず、反政府クーデターが発生し、11月2日に当時の大統領であったゴー・ディン・ジエムが殺害された。1955年にベトナム共和国の大統領に就任したゴー・ディン・ジエムは、当初、アメリカ政府の支持を得ていたものの、内政改革などへの助言を無視し続けたため、最終的にアメリカ政府に見限られた。その結果としてのクーデターであった。さらに同月22日、南ベトナム軍事司令部を設置し、アメリカ軍事顧問団の南

ベトナムへの派遣を決定したケネディ大統領が暗殺された。

A氏と残留日本兵2名(ここではB氏・C氏とする)との出会いは、勤務地である果樹(バナナ)園を通じてであった。A氏によれば、サイゴンの貿易会社社長がバナナを買い付けにメコンデルタに赴いた際、当時近隣で暮らしていたB氏のことを伝え聞き、紹介された。その後、カイベー町(thi tran Cai Be)近く、ティン河に浮かぶタンフォン(Tan Phong)島の南側に果樹園用の土地を見つけ、地主の代理人を通じて借り入れた(図1参照)。その農園長をB氏に任せたという。同地を、A氏は「第1農園」と表現していた。第1農園は約30ヘクタールであった。なお、A氏の回想によれば、カイベーからみて東側の領域が南ベトナム解放民族戦線(解放戦線)の勢力圏であったという。

1963年11月に赴任したA氏は、最初の数か月間、サイゴンで貿易関連のノウハウを学んだ。その後、第2農園を開園するためメコンデルタに赴いた。開園までのしばらくの間、B氏の家に世話になっていたという。1964年中には第2農園が完成し、



図1 第1・2農園周辺の地図。中央に第1農園が位置していたタンフォン島がみえる。タンフォン島の上流部寄り南側に第2農園が立地していた「竹の小島」がある。図中の1グリッドの幅は1,000 m。この地形図は、アメリカ陸軍地図局(U.S. Army Map Service)が1969年の情報に基づいて作製したもの。なお、アメリカ陸軍地図局は、その後アメリカ陸軍測地司令部(U.S. Army Topographic Command)に改組された(出典：5万分の1地形図。テキサス大学オースティン校ペリー・カスタンダ図書館所蔵, khkiem_ich-6229-4の一部<http://legacy.lib.utexas.edu/maps/topo/vietnam/khkiem_ich-6229-4.pdf>).

その農園長にA氏が着任した。第2農園は、第1農園のあるタンフォン島に隣接し、約2km離れた小島にあり、耕地面積が約12ヘクタールであった。地元では「竹の小島(Cu lao con Tre)」と呼ばれていた。もう一名の残留日本兵であったC氏は、この第2農園でA氏の部下として雇用された。とくにA氏の着任当初は通訳も兼ねていた。なお、当時、サイゴン以外に在住ないし拠点をもっていた(残留日本兵以外の)日本人は、A氏のほかにもう一名しかいなかったという⁸。

現在では、カイベーとタンフォン島とを結ぶフェリーが随時運航している。しかし、当時はそうした公共の交通手段がなかったため、会社でエンジン付きの船を購入して、島まで移動したという。カイベーからタンフォン島にある第1農園まで、エンジン付きの船で約40分かかった。また、A氏は、自身が管理する第2農園から第1農園へ向かうときに手こぎのボートを使用することもあった。

カイベーは、ミートーからさらに西に進み、現在の国道1号線(当時の4号線)をミートゥアン橋手前で南下した町である。サイゴンから約100キロメートルの距離にあった。当時、電話がなく、あったとしても民間人が利用できる可能性がほぼない状況下では連絡係が非常に重要な役割を担っていた。A氏の会社では、カイベーにベトナム人の連絡係を置いて、サイゴンとの連絡を密に取っていたという。連絡係の家には、会社の専用車を駐車したり、エンジン付きの船を係留したりした。

サイゴン駐在のA氏の友人から、コンテナ船が確保でき、コンテナ船が入港したという連絡が入ると、輸出までの時間を逆算し、バナナの収穫をおこなった。日中にバナナの収穫をおこなうと、すぐに商品価値がなくなってしまうため、収穫は夜間におこなうのが最適であるという。A氏は、あらかじめバナナの木に収穫期別に色づけをしておき、「○色がついたバナナを収穫するように」と

の指示を出した。収穫時、多い場合には300人近くを臨時雇用したという話であった。収穫したバナナを、水路で約10時間かけてサイゴンまで運搬し、コンテナ船に積み替えて輸出した。コンテナ船入港の通知は、連絡係がサイゴンからの言付けを持って訪れることもあれば、A氏の友人が直接農園を訪問することもあったという。ただし、サイゴン在住の友人が農園を訪れる場合、その日のうちにサイゴンに戻ることができなくなるため、機会としてはあまり多くなかった。

以上のように、当時、果物を輸出することには多くの困難をともなった⁹とのことであった。こうしたバナナは、競争を避けて主として小樽へ出荷していたとのことである。また、サイゴンまでバナナを輸送したものの、手違いなどでコンテナ船が確保できていなかった場合には、サイゴンで売却するしかなく「足元を見られ、買ったたかれた」という。さらに、収穫のタイミングがあわずに輸出できなかったバナナは農園の近隣で売りさばくしかなかった。ただし、A氏はこうした現地販売には直接関与していなかった。

いわゆるテト攻勢後、1968年3月に南ベトナム政府軍の攻撃で第1農園が一部被害を受けた。その後、戦争の激化もあり、社長の判断で1969年上半期にバナナ輸出業から一時撤退することが決定された。あくまで一時撤退であり、業務再開を前提としていたため、A氏は、同社長の依頼もあり、別の日系の貿易業者に就職し、サイゴンにとどまった。第1農園についてはそのままB氏が管理をして、第2農園は現地在住であったC氏に管理を委託した。しかしながら、上記の略歴の通り、バナナ輸出は再開されることなく、1975年4月30日を迎えた。

IV——戦争期の同時代的な記憶

以下、本章では、A氏のベトナム戦争期の語り

をエピソード別に記述していく。

解放戦線と自警団

解放戦線と南ベトナム政府軍の競合エリアに位置した第1・第2農園には、双方の関係者からの訪問があったという。多くの文献で指摘されてきたように、日が出ている時間帯には南ベトナム政府側につく関係者が、日が暮れると解放戦線のメンバーが訪問してきた。前者は、人民自警団(Nhan Dan Tu Ve)と名乗っていた。A氏の記憶では、自警団の人びとは、訪問すると、多くの場合、タバコやコーヒーを求めたという。解放戦線のメンバーは、6-7名で訪問するが、屋敷内に入るのは幹部らしき人物1名だけで、その他は家の周囲で見張りについていた。また、前者の人びとは、所持していた武器(ライフル)を簡単に試射させてくれた一方、後者の人びとは、銃弾を一発単位で管理していることを理由に試射を許可しなかった。

また、解放戦線からは、地代(thue dat)を求められたことがあったという。とはいえ、解放戦線は当該農園の土地所有者ではなかった。そのため、地代はあくまで名目であり、A氏は協力金の拠出を依頼されていた¹⁰。協力金は1年単位での支払いを求められた。支払い金額の交渉はA氏が担当した。さらに解放戦線の求めに応じて、一緒にサイゴンまで行き、要求された物品を購入したこともあった。農園以外で解放戦線のメンバーと会う場合には、服装やボートなどがあらかじめ指定されており、複数箇所¹⁰に別の案内人を配置するなどして、簡単に目的地にたどり着けないような工夫がされていた。つまり、解放戦線の人びとの居場所に関する秘匿性が高かった。なお、解放戦線のメンバーは、1ヶ月に1回くらいの頻度で農園を訪問し、協力金の要求以外に「何か困ったことはないか」という趣旨のことを問うたという。

後日談であるが、1992年のベトナム再訪以降に、A氏は上記の解放戦線メンバーと再会したそ

うである。タンフォン島でカイペー行きのフェリーを待っていたとき、初老の男性がA氏の前を行ったり来たりしていた¹¹。A氏はその行動が気になったものの相手の顔に記憶がなかったという。その後、相手が「日本人か」と声をかけてきた。そして解放戦線の一員として、戦争当時にA氏に会ったことがあると話し始めたという。立ち話をして再会の約束をしたものの、後日、A氏が電話連絡をしたときには当人は鬼籍に入ってしまった。立ち話の際、この男性が当時を回顧しつつ「当時、私たちはアメリカに出て行ってほしただけであった」という趣旨の発言をしたという。また、当時のベトナム民主共和国(北ベトナム)人民軍のことを「共産党」(Dang Cong San)や「あちら側の人たち」(nguai ben kia)などと表現していたとのことである¹²。

ローカルな戦争観

「サイゴンからだけでは、ベトナムのことはわからない」。これはA氏のことばである。さらに「当時のサイゴンは、アメリカの援助下で資本主義体制が整えられ、完全な消費社会であった」とA氏は回想する。前述のように、A氏は、1964年から約5年間にわたってメコンデルタ地方のバナナ農園に本拠地を置いていた。サイゴンとバナナ農園とを往復するなかで、二つのエリアの違いが鮮明に記憶に残っているのであろう。インタビュー調査の際の「いなかの人びとと[サイゴンの人びとと]は違う」([]内は筆者補足)ということばが印象的であった。したがって、当時のサイゴンは南ベトナム全域との比較では別空間ととらえてよいのだろう。

また、A氏は当時サイゴンに駐在していた日本人の報道関係者とも付き合いが深かった。そのなかでも3名ほどの人物について好意的に取りあげていた。うち1名とは、いまだに定期的に日本で会っているという。これらの人びとは、長期間に

わたり従軍して取材をしたり、解放戦線側からの取材を試みたりして、書籍や写真集を発表している。言い換えれば、サイゴン以外の空間でより多くの経験をもった人物であった。

さらに「いなかの人びと」である第2農園ならびに近隣の人びとは、解放戦線のことを、決してベトコン(Viet Cong)とは呼ばなかった。このことばが蔑称であることを理解していたという。人びとは、解放戦線のことを、単純に「解放」(Giai Phong)と呼んだり、解放戦線(Mat Tran Giai Phong)、さらには「あちら側の人たち」(nguai ben kia)と呼んだりしていた。これに対して、サイゴンではベトコンという表現が使われていたという。このことばの由来については諸説があるものの、A氏の解説によれば、当時のサイゴンではこのことばが頻繁に使われていたとのことである。

残留日本兵とB氏・C氏

A氏によれば、当時、サイゴンには「寿会」という残留日本兵の集まりがあったという。しかし、先に紹介したB氏・C氏はサイゴンから遠く離れて暮らしていたため、こうした会との接点もほとんどなかったようである。なお、『朝日新聞』によると1975年4月時点で寿会には約40名が所属していた(朝日新聞、1975年4月17日付け朝刊)。

こうした残留日本兵が敗戦後日本へ帰国しなかった／できなかった理由はさまざまであろう。たとえば、立川は、残留の動機として、ベトナム独立運動の支援、戦犯逃れ、終戦後の任務との関係、不慮の事故の影響などをあげている(立川、2002: 47-48)。また当時、残留日本兵のなかで敗戦後の日本へ戻ると、アメリカ軍に去勢されるとの言説があったという報告もみられる(阿奈井、1991: 182)¹³。

再び、バナナ農園の社会関係に目を転ざると、B氏・C氏間の関係については詳らかではない。A氏によれば、貿易会社の社長が初めてB氏に遭

遇したとき、同社社長はB氏が話す日本語をほとんど理解することができなかったという。ここから、当時B氏が長期間ないし定期的に日本語を使用するような環境下になかったと推察できる。言い換えれば、すくなくともB氏とC氏とは、顔見知りであったとしても日本語で頻繁に話す仲ではなかったと考えられる。また、C氏は、第2農園長のA氏と雇用関係にあり、それ以前に農園長に着任していたB氏とはそういった関係はなかった。

B氏のベトナム人の妻の実家は、アンフー(An Huu)というカイパーの中心から西へ20キロメートルくらいの距離に位置していた。この村落は、南ベトナム政府軍の攻撃によって大きな被害を受けていた。そこで、同村落で被災した人びとをB氏が第1農園に雇用していた。A氏の第2農園でも同村落の被災民を雇用していたとのことである。A氏の回顧によれば、B氏の農園長就任が同氏の社会的立場に変化をもたらしたという。確かに、実質的には北部仏印進駐から宗主国側にいた人間がかつての支配地域において好意的に受け入れられるとは考えにくい。農園長就任ならびに被災した近隣の人びとに雇用を提供したことで、当該社会におけるB氏への評価に変化があったことは容易に想像できる。

これに対して、C氏の社会的立場は第2農園勤務の前後で大きく変化しなかったのではないかとA氏は振返っている。C氏も、第2農園に勤務前、B氏と同じくアンフー村落の近隣に住んでいたようであるが、A氏は詳細を把握していなかった。またB氏と異なり、地元の人びとの雇用を創出したわけではなく、初期にはA氏の通訳役を務めたものの、あくまで被雇用者であったことも立場の変化を促さなかった要因であろう。A氏は、同じ日本人であるC氏を当時の農園における社会関係のなかでどのように処遇したらよいか苦慮したという。また、直接確認したわけでないとの断りがあったものの、1969年以降、会社がC氏に

管理を委託した第2農園を、現実的にはB氏が取り仕切っていたのではないかと推測していた。

1975年4月30日以降のサイゴン

サイゴン陥落前、A氏は日本大使館から帰国のための招集を受けた。指定された場所へ向かったものの、帰国は実現しなかった。1975年4月30日、A氏はベトナム大使公邸で当日を過ごした。その後、A氏は7月の帰国までのほとんどの期間を、妻の実家に世話になっていたという。

A氏によれば、サイゴン陥落直後の様子として、街中には解放旗(解放戦線の旗)が翻り、北ベトナムの国旗は確認した範囲では目につかなかったという。また、北ベトナム軍の兵士は、サイゴンに突入する際、北ベトナム軍を示す記章を剥がすように指示を受けたとのことであった。ここからは解放戦線による「サイゴン解放」が演出されていたことがうかがえる。

これに対して、5月15日に戦勝パレードでは、北ベトナムの国旗や北ベトナム人民軍が前面に押し出されていたという。実際にA氏が撮影したパレードの写真には、北ベトナムの国旗が掲げられていた。また、A氏が確認できた範囲で、解放戦線の戦闘服を着てパレードに参加したのは女性の一人のみであった。

また、5月1日以降のサイゴンでは、当時A氏が撮影した写真にみられるように、南ベトナムの人びとと、北ベトナム人民軍の兵士と一緒にコーヒーを飲む姿がみられた(写真1)。こうした人びとに、一緒にコーヒーを飲む理由をA氏が尋ねると「北の生活を知りたい」ということで、サイゴンの人びとが北の兵士を招いていたとのことであった。また、写真2には、地元サイゴンの人びとと思われる複数名が歩道に自転車やオートバイを寄せて、北ベトナム人民軍の兵士を取り囲んでいる様子が写されている。

これらの写真からは、和やかな様子が伝わって



写真1 北ベトナム人民軍の兵士とコーヒーを一緒に飲むサイゴンの人びと(A氏提供)



写真2 サイゴン在住とおぼしき人びとに取り囲まれる北ベトナム人民軍の兵士(A氏提供)

くると、A氏によれば、サイゴンの人びとは、これからどういった生活変化がおこるのか、そのための情報収集をしなかったのではないかと推測していた。また、A氏が話を聞いた一部の若い北ベトナム兵は、概して、サイゴンや南ベトナムのことにあまり精通していない雰囲気であったという。

V—むすびにかえて

「南の人々が望んでいたものは、何よりも祖国の独立と、漸進的な統一、そして南の自治だった。われわれ南の人間は、地域の特殊性を尊重したベトナム連邦ともいべきものを頭に描いていた」(友田, 1986 : 65)

「…[前略]ベトナムの共産主義者の大多数は

民族主義者で、祖国を解放するための最善の方法として社会主義の道を選んだ人たちだということを忘れないで欲しい」(友田, 1986 : 104)

「ほんとうに意見のちがいが出てきたのは、サイゴンが陥落し、党が権力を握ってからだ。統一、臨時革命政府や解放戦線の果たすべき役割、あるいは国民和解と協調の政策、そしてベトナムの民衆、とりわけ南の民衆の深い願い、といったものをめぐって、ハノイと南の間に大きな食い違いが生じた。[改行]とくに基本的な食い違いは、南の住民の自決についての姿勢だ。南の自決ということは、外国の干渉を排除することはもちろんだが、北の干渉も認めない、ということの意味している」(友田, 1986 : 221-222)

「臨時革命政府、平和勢力連盟、それに解放戦線の栄光は、1975年5月15日の勝利祝賀集會の日を境に去った」(友田, 1986 : 245)

以上「」内は、友田(1986)の本文中に掲載されたチュン・ニュー・タンの発言である。「」内は、引用者補足。

インタビュー調査のなかで、A氏から「チュン・ニュー・タン(Truong Nhu Tang)の回顧録の発言が当時の南ベトナムの人びと心理を最もうまくとらえているのではないか」との指摘をうけた。同書を読み直してみたところ、かつては斜め読みしてしまっていた上記の記述が改めて目にとまった。¹⁴

同書によれば、チュン・ニュー・タンは、「都市部の富裕層の知識人」に位置づけられる。必ずしも共産主義とは相容れない、こうした人びとが共産主義者をも含む解放戦線に協力・協調して

いった背景には、上記のような感性、つまり「祖国統一の手段としての共産主義」というニュアンスが存在していたことは十分推察される。しかしながら、1975年5月15日以降、チュン・ニュー・タンは「同じ側」にいたと思っていた人びとが実は「あちら側」の存在であったことにだんだんと気がついてゆくことになった。こうした点は、A氏が1975年5月15日に目撃したパレードの様相や、後年カイバーで遭遇したかつての解放戦線のメンバーとの会話と部分的に合致する。

また、5月15日当日のパレード(戦争祝勝集会)において、チュン・ニュー・タンは、軍隊の行進に際し、ほとんどが黄星赤旗を掲げた北ベトナム人民軍であり、わずかに、300人しか解放軍ゲリラがいなかったと回顧している。解放戦線の師団はどこにいったのかという問いに対して、「軍はもう統合してしまった」と返答されたという(友田, 1986: 203-204)。事実、1977年1月に南ベトナム解放民族戦線は、ベトナム祖国戦線に吸収される形で正式に解体された。

解放戦線がゆるやかに組織解体してゆくなかで、同組織に参加していた人びとがこのような意識変化を経験したのであれば、解放戦線の人びとを「あちら側の人たち」(nguoi ben kia)と呼んでいた南ベトナムの大多数の人たちにとって、共産主義者はさらに遠い存在であったことは間違いない。再び、チュン・ニュー・タンのことばを借りれば、「ベトナムの農民に、共産主義を理解せよ、と試みてきたところで、けっして理解できないだろう。ベトナム人にとって、おそらく中国人にしても同じだろうが、何よりも大事なものは家族であり、祖国なのだ。それ以外の世界は、《よその》であり、異質なものでしかない」(友田, 1986:

297)ということになる。言い換えれば、わからないものは語らない／語れないという日常空間が形成されていたともとらえうる。

であれば、ベトナム社会へのコミットメントが深化し、こうした人びととの関係性が強化されるほど、「アメリカの侵略に対抗する」という以外の戦争に対する政治的発言を抑制するような装置が駆動していたと考えてもよいのではないだろうか。ここでいうコミットメントとは、単に時間的な長さを意味するだけでなく、「サイゴンにいただけではベトナムのことはわからない」というA氏の発言に裏打ちされた空間的な広がりも指す。A氏や関係した日本人の人びとは、このような社会空間のなかを生きていたととらえられる。

以上のように、南における南北統一という社会正義は、アメリカの撤退を大前提としつつ、その内面ではさまざまな理想や思惑をもつアクターが複雑に絡み合っ¹⁵て歴史的に展開していたと理解すべきなのであろう。

最後に、今後の課題として、これまで公に語ってこなかった人びと、言い換えれば広義のサイレントマジョリティのライフストーリー蒐集・分析、ならびに先行研究や歴史資料との摺り合せの必要性があげられる。

謝辞

2020年3月に立教大学観光学部を定年退職される豊田由貴夫先生に感謝して、この小論を献呈いたします。豊田由貴夫先生には、海外でのフィールドワークの面白さや大変さを教えてもらいました。本稿がわずかながらでもその恩返しになっていれば幸いです。また快くインタビュー調査にご協力いただいたA氏には感謝の言葉もありません。さらにA氏には、本稿に掲載させていただいた当時の貴重な写真や文献をご提示いただきました。以上、記して謝意を表わします。

註

1 ライフストーリーとライフストーリーの相違点については、さしあたり桜井(2012)を参照のこと。

2 手元にある9年生の歴史教科書(Lich Su 9, Nxb. Giao Duc Viet Nam)の目次を確認してもベトナム戦争という用語は登場し

- ない。なお、同教科書は再版第8版(2013年)である。
- 3 この他にも、筆者は未見であるが、中川(1970)のような当事者の記述がある。なお、こうした当時の従軍者が残した後年の記録を分析する際には、その背景となる日本における戦争観の時代的な変化を考慮する必要がある。日本の戦争観の変化については、さしあたり吉田(2005)を参照のこと。
 - 4 この他、阿奈井(1991)は、ベトナム戦争時の旧日本兵との出会いとその後の再会を紹介している。この記述は当時を知る貴重な資料である。また、2018年4月から上映会が始まった残留日本兵の記録映画『私の父もそこにいた』もある(朝日新聞デジタル, 2019年7月29日閲覧)。
 - 5 具体的には2019年7月21日(日)に東京都内の喫茶店で5時間、8月30日(金)に同じく都内喫茶店で3時間半、計8時間半のインタビュー調査をおこなった。また、9月16日(月)にA氏がホーチミン市滞在中に簡単な補足調査も実施した。
 - 6 “サイゴン解放”という表現と“サイゴン陥落”ではそのニュアンスが異なる。本稿では、A氏のことばをそのまま使用した。本稿の文脈上、一カ所のみ「サイゴン解放」と表記している。
 - 7 A氏は、子ども時代にバナナのたたき売りの人から小遣いで買ったバナナを、弟と大事に食べたことを語ってくれた。かつてバナナはそれほど貴重な果物であった。
 - 8 もう一名の人物について、A氏によれば、ロンボ・プランに基づき派遣された農業技術者とのことであった。
 - 9 この他にも、A氏は、バナナ栽培・出荷についての詳細を説明してくれた。この点については、紙幅の関係上、稿を改めて論述したい。
 - 10 第2農園の地主はサイゴンへ避難していたため、地代はサイゴン事務所から支払われていた。第1農園の地主も同様にサイゴンに避難しており、地代はサイゴン事務所を通じて処理されていた。
 - 11 A氏は、B氏とその妻の法事(Dam gio)のため、現在でも毎年カイペーを訪問している。また、同地域には果樹輸出会社に誘ってくれた友人の散骨をしており、その供養も兼ねているということである。
 - 12 当然ではあるが、こうした発言は、ベトナム戦争終結後の時代を生きた後の回想として扱う必要がある。また、A氏から聞き取りをした、この元解放戦線のメンバーとA氏名との会話のなかには、この他にも非常に興味深い内容があった。この点は文献資料との摺り合せの上で、別稿にて検討したい。
 - 13 敗戦後の日本へ帰国しなかった理由として、アメリカ軍による日本軍人の「非男性化」というコンテクストが登場することは興味深い。今後、五十嵐(2007)などの日本国内における敗戦の記憶との議論とあわせて考察をすすめてみたい。
 - 14 なお、チュン・ニュー・タンの著作には、チュオン・ニュー・タン(1986)などがある。同氏のカタカナ表記はそれぞれの著作の邦訳に準じている。
 - 15 あわせてチュン・ニュー・タン(チュオン・ニュー・タン)のような「外部」の当事者の語りにも着目する必要がある。たとえば、近年ではベトナム難民としてカナダに渡ったキム・チュイが自伝的小説を発表している(キム・チュイ, 2012)。国民国家ベトナムの枠組みの外から発信される記憶との摺り合せも今後の課題である。

文献

筆者未見の文献には文献末に*をつけた。

- ❖青沼陽一郎 2006. 帰還せず——残留日本兵六〇年目の証言. 新潮社.
- ❖阿奈井文彦 1991. ベトナムへ帰った「日本兵」. 中央公論. 106-12(1277). 180-203.
- ❖五十嵐恵邦 2007. 敗戦の記憶——身体・文化・物語 1945～1970. 中央公論新社.
- ❖井川一久 2005. ベトナム独立戦争参加日本人の事跡に基づく日越関係. 東京財団研究報告書. 東京財団政策研究所 <<http://nippon.zaidan.info/seikabutsu/2005/01036/pdf/0001.pdf>>.
- ❖井川一久 2006. 日越関係発展の途を探る研究 ヴェトナム独立戦争参加日本人—その実態と日越両国にとっての歴史的意味—. 東京財団研究報告書. 東京財団政策研究所 <<http://nippon.zaidan.info/seikabutsu/2006/00197/pdf/0001.pdf>>.
- ❖石川文洋 1991[1986]. 報道カメラマン. 朝日新聞社(朝日文庫).
- ❖石川文洋 2018[1986]. 戦場カメラマン. 筑摩書房(ちくま文庫).
- ❖石田松雄 1990. ベトナム残留日本兵——動乱の30年を生きぬいて. 筑波書林.
- ❖大石芳野 1984. 証言する民——十年後のベトナム戦争. 講談社.
- ❖岡村昭彦 1965. 南ベトナム戦争従軍記. 岩波書店(岩波新書).
- ❖岡村昭彦 1966. 続 南ベトナム戦争従軍記. 岩波書店(岩波新書).
- ❖開高健 1990[1965]. ベトナム戦記. 朝日出版社(朝日文庫).
- ❖加茂徳治 2008. クァンガイ陸軍士官学校——ベトナムの戦士を育み共に闘った9年間. 暁印書館.
- ❖キム・チュイ 2012. 小川. 山出裕子訳. 彩流社.
- ❖ゴジャ, クリストファー E.・立川京一 2001. ベトミンとともに戦った日本人. 軍事史学. 36-3・4(143・144). 218-232.
- ❖古森義久 1985[1978]. ベトナム報道1300日——ある社会の終焉. 講談社(講談社文庫).
- ❖近藤紘一 1981[1978]. サイゴンから来た妻と娘. 文藝春秋(文春文庫).
- ❖近藤紘一 1985[1975]. サイゴンのいちばん長い日. 文藝春秋(文春文庫).
- ❖桜井厚 2012. ライフストーリー論. 現代社会学ライブラリー7. 弘文堂.
- ❖武内房司・宮沢千尋編 2015. 西川寛生「サイゴン日記」1955年9月～1957年6月. 風響社.
- ❖立川京一 2002. インドシナ残留日本兵の研究. 戦史研究年報. 5. 43-58.
- ❖チュオン・ニュー・タン 1986. ベトコン・メモワール——解放された祖国を追われて. 吉本晋一郎訳. 原書房.

- ❖友田錫 1986[1981]. 裏切られたベトナム革命——チュン・ニュー・タンの証言. 中央公論社(中公文庫).
- ❖中川武保 1970. ホー・チ・ミンと死線をこえて. 文藝春秋. *
- ❖中村悟郎 2005. 母は枯葉剤を浴びた——ダイオキシンの傷あと. 岩波書店(岩波現代文庫)[新版].
- ❖秦郁彦 2012. 昭和史の秘話を追う. PHP研究所.
- ❖林英一 2012. 残留日本兵——アジアに生きた一万人の戦後. 中央公論社(中公新書).
- ❖ファン・ゴク・リエン 2008. ベトナムの歴史——ベトナム中学校歴史教科書. 世界の教科書シリーズ21(今井昭夫監訳) 明石書店.
- ❖本多勝一 1981[1968]. 戦場の村. 朝日新聞出版局(朝日文庫).
- ❖吉沢南 1986. 私たちの中のアジアの戦争——仏領インドシナの「日本人」. 朝日新聞社(朝日選書).
- ❖吉田裕 2005[1995]. 日本人の戦争観——戦後史のなかの変容. 岩波書店(岩波現代文庫).
- 【新聞・インターネット資料】
- ❖朝日新聞, 1975年4月17日付け朝刊.
- ❖「茨城」ベトナム残留兵の父の足跡追った映画の上映会「朝日新聞 デジタル」<<https://www.asahi.com/articles/ASM7V5WVCM7VUJHB00J.html>>2019年7月29日閲覧.

